集英社の新刊ご案内

この生き方そのものが奇跡！
78歳「左手のピアニスト」の生き様

「命（いのち）の響（ひびき）」

――左手のピアニスト、生きる勇気をくれる23の言葉――

困難を乗り越え、新たな音楽と感動を生み続ける
ピアニスト舘野泉の、心に響く23の言葉とエピソード！

78歳にして現役、左手のピアニスト舘野泉さん。2002年に舞台で倒れ、右半身マヒとなった困難な状況からリハビリを重ねて、2004年に奇跡的に復活。右手が使えない状況をありのままに受け入れ、発想も変え、「左手のピアニスト」として新たな出発を果たします。決してあきらめない不屈の精神を秘めながらも、あせらずたゆまず……ときには飄々としたユーモアも披露します。そのしなやかな生き方は多くの人々の感動を呼んでいます。

NHKドラマ「平清盛」でのテーマ曲の演奏は、驚異的な力強さと美しさで大きな話題となり、震災前から現在まで続けている福島県相馬市でのコンサート活動は年々注目を集めています。さらに自ら主宰している「左手の文庫」による新曲支援では、多くの作曲家に「左手のためのピアノ曲」の作曲を働きかけ、音楽の新たな世界を切り開いてきました。

常に前を向いて生きる、世界が認める奇跡のピアニスト舘野泉さん。
心に響く彼の23の言葉とエピソードを集めました。
温かな人柄と生き生きした言葉に、生きる喜びと勇気がわいてきます。
来年80歳に向けて新たな活動を展開する　鱠泉さんの集大成といえる一冊。
是非、多くの方々にご紹介のほどお願い申し上げます。

5月26日（火）
発売予定
定価：1500円＋税
（予定）

第一章
67歳「左手のピアニスト」としての再出発

・行く道はひとつ。左手で復帰すること。ほかのことはあとからついてくる

・ピアノが弾けなかった二年間の空白に感謝する。
それは、次の世界を生み出す大事な時間だった

・精神に胡椒が入ると「人生の達人」になれる

・ひもじくて、ひもじくて……。音楽への飢え、魂の飢餓が再出発のエネルギーになった

・左手だけでもいいんだ……。大事なことは何を表現するか何を伝えられるかだ

第二章
ハンデに妥協せず音楽の本質を追求しつづける

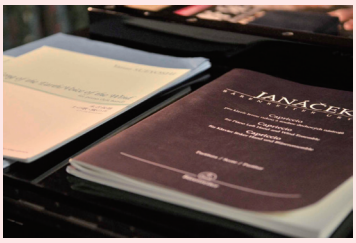
・常識ってなんだろう。
父は、僕を枠にはめなかった。母は、「はみ出すぐらいが面白い」と言った。
だから、僕はいつも人生で大きな空間が持てた

・できるか、できないかは考えない。
やりたいか、やりたくないかやりたいと思ったらもう駆け出している

・あれができない、これができない、と落ち込むのはもったいない。
積み重ねてきたものは何があっても奪われない

・音楽家は「手職人」。この手を通じて、音をつくりその音で、自分の心を表現する。
毎日こつこつ手仕事を続けるうちに気がつけば78歳になっていた

第三章
音楽は生きる喜び　人と人をつなぐ



・音楽は生きる喜び。人と人をつなぐ

・求められれば、どこへでも行く。
どんな会場、どんなピアノでも最高の音を響かせたい。聴く人と心を通わせたい

・「誰かのため」は「自分のため」より頑張れる

・生き延びるために生きているのではない。生きがいのあることのために生きているのだ

・凍てついた冬に萌えいずる緑が準備される。影を通ってきたからこそ光は美しい
世界と人生を抱きしめたい

・前に向かって歩いていると協力してくれる人が現れる。一つのことをやり遂げると次の扉が開く。
夢が夢を生んでゆく

撮影：掘田力丸

著者プロフィール：
東京藝術大学音楽学部ピアノ科を首席で卒業。1964年よりヘルシンキに在住し、シベリウスをはじめ、ノルドグレンなどフィンランドの近現代作曲家の作品に取り組む。1968年メシアン・コンクールで第２位。国立シベリウス・アカデミーの教授、日本シベリウス協会会長などを務める。2002年リサイタル中に脳溢血で倒れ、右半身に麻痺が残る。2003年８月に復帰、翌年、日本初の左手のピアノ作品によるリサイタルを開く。その後も「左手の文庫」を主宰し、多くの作曲家に左手のための新しいピアノ音楽を委嘱し、リサイタルで発表し続けている。

■本書に関するお問い合わせ■
取材、書評などのご連絡は（株）集英社　学芸編集部　佐藤絵璃あてにお願い申し上げます。
カバーのｐｄｆ画像や舘野氏の写真データなども、すぐにメールでお送りいたします。

（株）集英社　学芸編集部　佐藤絵璃
〒101-8050 東京都千代田区神田神保町3-13-1　Tel 03-3230-6068　Fax 03-3230-1927　E-mail e_sato@shueisha.co.jp